

第33回夏期福音特別集会 第2回聖書講筵 盛大なる饗宴

——ルカ伝第14章12～27節——

伊東 1986年7月26日

小池辰雄

天国人と地上人 羔の婚姻 もし天国に入りそこなつたらどうするか 神・キリスト中心の生き方 自分を捨ててかかる 天国を断つて地獄へ行きたいのか 無即無限無量 永遠たる愛の炎として燃える

【ルカ14】

12 また己を招きたる者にも言い給う 『なんじ昼餐ひるげまたは夕餐ゆうげを設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人などをよぶな。恐らくは彼らも亦なんじを招きて報いをなさん。13 饗宴を設くる時は、寧ろ貧しき者・不具・跛者・盲人などを招け。14 彼らは報ゆること能わぬ故に、なんじ幸福さいわいなるべし。正しき者の復活よみがえりの時に報いらるるなり。

15 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う 『おおよそ神の国にて食事する者は幸福さいわいなり』 16 之に言いたもう 『或人ある、盛んなる夕餐ゆうげを設けて、多くの人を招く。17 夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、18 皆ひとしく辞りはじむ。初の者はじめいう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」 19 他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験ためすために往くなり。請う、許されんことを」 20 また他の者いう「われ妻を娶めとれり、此の故に往くこと能わず」 21 僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いえあるじいかりて僕に言う「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」 22 僕いう「主よ、仰おおせのごとく為したれど、なお余あまりの席あり」 23 主人、僕に言う「道や籬まがきの辺ほとりにゆき、人々を強しいて連れきたり、我が家に充みたしめよ。24 われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐ゆうげを味い得る者なし』

25 さて大なる群衆イエスに伴いゆきたれば、顧みて之に言い給う、26 『人もし我に來りて、その父母・妻子・兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、わが弟子となるを得ず。27 また己が十字架を負いて我に従う者ならでは、我が弟子と為るを得ず。』



●天国人と地上人

ルカ伝の14章15節から24節までは他の共観福音書にはない。ルカ伝の特有の記事です。その前に12節から、

12 また己を招きたる者にも言い給う『なんじ昼餐ひるげまたは夕餐ゆうげを設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人などをよぶな。恐らくは彼らも亦なんじを招きて報いをなさん。13 饗宴を設くる時は、寧ろ貧しき者・不具・跛者・盲人などを招け。14 彼らは報ゆること能わぬ故に、なんじ幸福さいわいなるべし。正しき者の復活よみがえりの時に報いらるるなり。

と。そういうキリストの御言がある。キリストの天国は、そのおもな人たちは、地上でけなされているような、また、顧みられないような、そういうような人たちです。パウロもコリント前書のところで、天国の人は、地上では弱き者、無きが如き者、正反対の人たちが天界では主な人たちになると言う。ということは何かというと、要するに、神さまを神として崇あがめていない歩き方——傍若無神かたわですね、傍ら神無きが如し、これが非常に日本は多いわけですが——そういうのは天界にはちよつと入れない。

そういうことで、地上でいろいろ栄えたり、誉められたり、いろいろな地的な幸福に与かっている者は、それで良しとして生きている人は、これは天界には行けない。地上でどのような貧しかりうが富んでいようが、知識があるうが無かりうが、そういうものを中心にしている者はダメだと。要するに、

「すべてを神のために用いているか、人のために自分のためにやっているか」

これが天国人と地上人との根本的な違いであるということを書いておられるわけです。それで、15節のところに行きまして、

15 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福さいわいなり』16 之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐ゆうげを設けて、多くの人を招く。17 夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、18 皆ひとしく辞ことわりはじむ。初の者はじめいう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」19 他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験ためすために往くなり。請う、許されんことを」20 また他の者いう「われ妻を娶めとり、此の故に往くこと能わず」21 僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いへあるじいかりて僕に言う「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」22 僕いう「主よ、仰のごとく為したれど、なお余の席あまりあり」23 主人、僕に言う「道や籬まかきの辺にゆき、人々を強しいて連れきたり、我が家に充たしめよ。24 われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐ゆうげを味い得る者なし』



この一番終わりの24節が一番大事な節です。キリストは、「招きたる者」というのは選民イスラエルを暗に指していらつしやるわけです。

『俺たちこそは神に選ばれた招かれた者である、我々の父にアブラハムがいる』
と言うなかれ」

と、最後の預言者ヨハネが言いましたが、その同じことをキリストは言われた。
日本でも、

「有名校を出れば」

とか何とか言つて、有名校や何かをしょつちゅうねらつて、受験勉強をすることが大体社会の通念になつていてるでしょ。私は独協中学・高等学校の校長をしていた時にも、

「何も大学へ行かなくなつていいんだ。一人ひとり——自分は手仕事が好きだつたら、手仕事の先生の所に弟子入りしろ——何にしろ、自分が賜つた一番大事なものを中心にして、それを使命として生きろ」

と、はつきり言いました。私みたいな校長はあまりいないでしょうね。一人びとりは神さまの作品ですから、みんな神品しんぴんなんだ。落ちこぼれなんて者は一人もいない。私は、「落ちこぼれ」なんていう言葉は大嫌いだ。それを先生方や教育者が使つたりする。文部省なんか一遍ひっくり返つてしまつた方がいい。共通一次とかいって、ゴタゴタゴタゴタやつてゐる。各大学の特色でやつていけばいいんです、各専門学校のそれぞれの特色で。バラはバラ、百合は百合、カーネーションはカーネーション。真似することはしない。そういう大交響楽、百花繚乱ということですよ。

各民族はそれぞれの特色がある。何も世界は喧嘩する必要はない。馬鹿げきつたはなしなんだ。そういう分かりきつた話が、おかしなことで喧嘩になる。政治家なんていつたつて、今の政治家に、西郷南州みたいな人がいないんだ。だから、あなた方はその天下一品を本当に自覚して、

「神のものである、神の品である、自分ではないんだ」

という、その自覚をもつて持つていただきたい。人にどう思われようと、そんなことは構わない。

ところが、

「自分はアブラハムの子である、選民イスラエルだ」

とか、そういう伝統にあぐらをかいたようなのは困る。一人びとりが神・キリストに直結で、非連続の連続というわけで、いわゆる連続してない。本当のイスラエルの民は、いわゆるイスラエル民族ではないんだ。これは、パウロがちゃんとやっている通り、新しきイスラエルです。



● 羔の婚姻

私は日曜講筵をやっているでしょ。そうすると、やはりこのこと同じなんだ。

「今日はお客さんが来たので行きません」

なんて電話がかかってくる。私は、

「お客さんを連れて来い」

と言うんだ。

「大体、日曜というのは私はダメなんだ」

ということ、なぜはつきり普段から仰っておかないんですかね。日曜というのはキリストの復活の生命をいただく日なんだから。今日は土曜日で、土曜日というのは十字架と復活の間の、聖霊が胎動する日なんだ。それで、何のかんと言ってやって来ない。そういういろんな理由づけは一つも聞きたくない。それはまあ、突然病気になったり、万やむをえないことはありますよ。何も、律法で「日曜を守れ」なんて言っているのではない。

「私は行けませんけれども、今日はこういう所で日曜らしく人を助けます」

「どうぞ行ってらっしゃい、結構です」

と。要するに、安息日というのは、神さまの中に安息すると力が来るんです。のほほんとしていてのではない。遊ぶのではない。

ところが、キリストはこの譬話でもう歴史の終わりのことをちゃんと見通しておられるわけだ。新天新地、黙示録の終わりの方。これは大饗宴なんです。黙示録の第19章から後、そういう羔こひつじの婚姻の大饗宴がある。藤井先生はそれを本当に歌いたかった。ところが、先生の詩は遂に、『羔の婚姻』という詩の下篇の第十歌くらいで切れてしまった。先生はあと2年間生きていけると、完成したんですけれども、未完成交響楽になってしまった。

キリストを信ずる者たちは花嫁であり、キリストは花婿であるという譬たとえをもつて語っておられる。人生の一番祝福された高調の時が、この結婚の時ですが。それを歴史の終わりに黙示された、啓示されたわけです。本当に天界の一番輝かしい饗宴、それを既にここでもって見ておられた。

「何のかんと言つて、それに来ないようだったら、天国の最後の所に行けないぞ」

と。地上で涙を流した人、血を流した人、苦しんだ人、運命環境においていろいろ苦難を負った人。御名のために苦難を負わないのは本当の生き方ではないんですよね。キリストを信ずる者は、必ず何らかの意味において苦難が来る。その苦難に耐えて、その回りに天国を常に現しながら歩いていく。それが聖霊の力なんです。

運命環境の変化を、お天気が変わって、

「ああ今日はいい天気だ」

といって喜ぶのではない。雨であろうと嵐であろうと雪であろうと何だつて結構だ。いつも、そこにおいて本当にキリストの光を受けて歩いている。ロウソクやランプや蛍光灯



の光は、これを消すと暗くなるかと思つたら、太陽の光があつた。夜になつて、明かりを灯す。消したと思つたら、星が光つていた。要するに、この霊界の太陽、星——昨日は雅号を「天星」と書いたけれども——その光を浴びているような人。いや実に、回りが暗ければ暗いほど、逆に光る人。これはキリストの光をいただいている。

「汝らは世の光なり」

とキリストが言われた。

「私がお前の中で光るんだぞ」

ということです。

目がお見えにならない方がここにお一人来ていらつしやる。私の母も失明しました。私はそれを思うと時々、息が詰まりそうになつた。けれども、闇の中に居る人が、実は一番本当の光を見る。我々の肉眼の光以上の光が見える。耳のつんぼのベートーヴェンは、楽器で弾かれた音よりもつと素晴らしい音を聞いて、彼は作曲している。霊の世界というのは、そういう凄い五感以上の世界をもっている。

「暗黒における無の光はものすごいんだ」

ということ、エックハルトも言っている。あのドイツの神秘家エックハルトは凄いやつです。

聖霊をいただいている世界は行き詰まりを知らない世界なんです。我なる「I」を「O」「無」で割ると、「無限無量」なものが出てくる。「無」はキリストの十字架です。さきほどの33番のあのイザヤ書の讚美歌は私の讚美歌のうちの傑作の一つです。じつと皆さんの歌うのを聞いていて、私はもう心の中で涙していた。(召団讚歌A33「主なるキリストは」イザヤ49:55、1982年11月5日作)

地上で一般の人に誉められるような人になつたらダメです。認められない、けなされる、迫害される。それが本当に神さまの靈止ひとです。波長が合わないんだから、地上のとはね。

●もし天国に入りそこなつたらどうするか

こうやって、いろいろ断る。断るのは、みな地上の相対的なものを肯定しているからです。日常の生活では、いいですよ、いくら肯定したつて。けれども、肯定の奥に否定をもつていなければダメなんです。

「私が本当に肯定しているものは、こういうものではないぞ」

というものを持つていなければ。パウロは、

「弱き者には弱き者に、かたくなな者にはかたくなになるなり」

と。いろんな人にでつくわして、その人と同じような次元に自分を入れる。ということは、その次元を救い上げるために入るんです。それと妥協するために入るのではない。皆さんが、いろんな実際の生活でもつて、そういうものにでつくわすですよ、



「ああ結構だ」

と。けれども、その結構の奥に結構でない世界をちゃんと自分は持っていない。そして、そちらの方にグーツと導き上げてしまう。そういう秘訣を持っていないとダメです。

「ああいうことをあれが言ったが、或いはしたが、やっぱりちよつと違うな」

という、そういうものを持って交わっていかないかね。ただ何でも相対的に否定してしまつてもしょうがない、共同生活をしてるんだから。

人の良心といえますか、心といえますか、魂といえますか、本ものにでつくわすと、やっぱり感ずるんですよ、その人に良心がある限り。何か打たれるんですよ。何か心を打つようなことを時々表さなければダメです。それが証あかしなんです。それがピリッピリッと現れないような、ピカッピカッと現れないような生き方をしたらダメなんだ。理屈ではないんです。皆さんにこんなことを言つては悪いけれども。私は第八巻を皆さんに送つたね。私は正直、私の著作集というのは、どの巻にしても生命賭けでこれを書いたんですよ。だから、お読みくださつて、「ああ、これは」といつて感じたら、なぜ葉書一枚でもくださらないんですか。

「一人だに夕餐を味わい得る者なし」

とあるが、

「一人だに第八巻を味わつた者はない」

と私は言つたら悪いですか。私は気合の人間ですから、何かおざなりな事は嫌いなんだ。もう著作集なんか止めようかと思う。それは言葉は少し激しくて申しわけありませんけれども。しかし、もちろん私はあなた方を信じているし、愛しているし、お読みになつた時はお感じになつていられることも分かります。私は藤井先生の雑誌をいただいて、感じた時には確かに先生に書きました。まあ、いいです、そんなことは。とにかく、

「招きたる者ののうち、一人だに夕餐を味わい得る者なし」

という、このキリストの言葉。我々がもし天国に入りそこなつたらどうするか。キリスト召団というのは、ひとりも残らず——神さまの世界に私はしんがりに入つて行きたい——あなた方は先に行つてくださいよ。天国の門が閉じる一番しんがりに、私は

「主様！ 入れてください」

と言つて入る。

●神・キリスト中心の生き方

「一人だになし」と、こういうキリストの言葉が来たら、この前に平伏さなければダメです。

「俺たちは……」

なんて思つたら、とんでもない間違いだと。絶対矛盾の自己同一みたいなことを私は言いました。あなた方は神品であると言つた。神品の自覚は、神品に絶するところにある。何者でもないというところ、そこに本当の神品がある。



この「無」の世界は、私のいう「無」というものは普通はとても分からん。分からなくていいんです。(異言)…。キリストさまの前には、もう、何をか言わん。詩篇第62篇に、「われ黙してただ神を待つ」

という言葉がある。およそ何であろうと、第一級のものを相手にしなさいよ、皆さん。和歌の世界であろうと、俳句の世界であろうと、文学であろうと、芸術であろうと。あるいは事業のことであろうと、学問のことであろうと。第一級のものを、それを本当に自分の中に溶かし込むような読み方をしなければ。第一級の超一級は、何といっても聖書ですから。

「沖に乗り出だせ」

というのは、

「聖書の奥深く限りなく乗りいだせ」

と。聖書一卷がなかったら、いわゆる世界の文学も哲学も本当はない。学問も科学も、偉大な科学者アインシュタインにしる、ニュートンにしる、みな聖書を重んじた人たちです。マルクスでさえそうなんだ。とにかく、これは神さまの啓示の書ですから。どこが間違ってるの間違ってないのと、そんなことではない。日本語の聖書で結構ですから。若い人はギリシャ語、ヘブライ語をやつていいけれども、ギリシャ語やヘブライ語が分かったから、それだけ聖書が分かるというものではない。ギリシャ語、ヘブライ語、日本語、ドイツ語、英語、フランス語、何でもいい。その奥の神の根源語が読めてこないとダメです。根源の響きがある。私は自分で雅号を「天韻」なんていうが、あの「韻」は響きという字ですから。

集会には何があんでもやつて来るといふ、この気合です。どうしても行かざるを得ずとしてやつて来る。試験があろうがなからうが。内村先生は、日曜日は勉強しなかった。もっぱら聖書です。翌日に試験があつたら、月曜の朝早く起きて——先生はそれもする必要はなかったでしょう——私は月曜の朝早く未明に起きて勉強した。日曜は勉強しなかった。

とにかく、少し気が違ったようにならないとね。結局、神・キリスト中心の生き方という事です。私はただ日曜の話をしているのではない。キリスト中心の行き方をする。それは聖霊が来ていると、パウロのように、

「一切の秘訣を得たり」

ということになりますから。キリスト中心の生き方をしていく。何でも、本当の意味で楽しくなる。初めのうちはつらくたつてしようがない。勉強が勉強でなくなる。親しむということ。私はドイツ語を教えるときにも、ドイツ語を勉強しろと言わない。

「ドイツ語に親しみなさい。毎日親しんでください。今日は読まなかったら眠りが悪いという位になりなさい」

と言う。しかし、さっぱり実行しないんだ。

「汝、生活において、何ごとも延期するな。

汝の生活は行為また行為であれ。」



“Du im Leben nicht verschieben.
Sei dein Leben Tat um Tat.”

これはゲーテの言葉です。

「二日の仕事は一日で足れり」

という。「一日一生」という、そういう生き方をしろと。しかも、その行為というのは、み霊の力における行為だから。本を読むことも何でも行為なんだ。台所で仕事することも行為です。これが本当に生きるということですよ。

●自分を捨ててかかる

それで、これはまた、キリストの言葉は凄い。

²⁵さて大なる群衆イエスに伴いゆきたれば、顧みて之に言い給う、²⁶『人も
し我に來りて、その父母・妻子・兄弟・姉妹・

「恋人」というのがないけれども、「恋人」を入れてください。

己が生命までも憎まずば、わが弟子となるを得ず。

と。誰がこんなことを言えますか。大変なことです、イエスというひとは。

²⁷また己が十字架を負いて我に従う者ならでは、我が弟子と為るを得ず。

と。さあ、誰が本当にキリストの弟子だか。人のことなんか言う必要ない。自分が本当に弟子だろうか。私なんかはもう落第だ。

「己のごとく汝の隣りを愛すべし」

というキリストの言葉があるのに、キリストは今度は

「己を憎まずば」

と、まるで反対のことを仰る。己を愛することは人間の本能なんだ。その本能のように隣人を誰でも愛しなさいと言う。

「自分を愛することをひっくり返して、隣の人を愛せよ」

と。本当は「ひっくり返せ」ということなんだ。

「愛とは己を与えることなり」

という。キリストの愛は己を与えた愛ですから。

「己を与えるには、己を何者ともしない、憎まなければ」

ということになる。「こんな者は」と言つて、自分を捨ててかかるような、その気合。そうすると、グーツとキリストの力が来るんです。キリストの力が、生命がくる。もう、それはすごいです。そして、グツと祈つてごらん。一瞬でもつて、バツと光り、それは通ずる。その境地に入らなければ、祈つたつてダメなんだ、ただ「お願いします」なんていうのでは。自分が生半かに生きていたのでは。お願いがお願いにならない。あまり一足飛びにそこま
でいなくてもいいですけども、まあ、そこまでいつてくださいよ。



●天国を断って地獄へ行きたいのか
なぜ断ってはいけないうと、

「私は地上の何者も与えることのできないものを与えようとしているのに、なぜこの大饗宴を断るか。選民なんていつたつてダメではないか、お前たちイスラエル人は」

と、キリストは言つてらつしやるわけだ。キリストを拒み、パウロを拒んでしまった。今でもイスラエル人はいわゆるユダヤ教で、旧約だけで新約は認めない。キリストはあいか
わらず十字架である。

「最後にユダヤ人が悔改めたら、その時には世界の終りがくる」

とパウロがロマ書11章で言っている通りです。パウロもそれを待つてるんだ、仕方無く。

「同胞のためにはキリストに捨てられてもいい」

とパウロは言った。それくらい、パウロは自分がパリサイであつたから。

「私はパリサイでお前たちと同じであつたが、お前たちは、ひっくり返らなければダメだぞ」

と、パウロは言っている。激しい言葉だ。ロマ書9章の言葉です。

「天国を断って、地獄へ行きたいのか」

というわけだ、キリストのこの言葉は。断つて、日曜日に行つていろんなことをする。魂の世界はごまかしがきかないから。我々はこの地上の生活を終わった時に、

「さあ私はどこへ行くんでしょうか？」

と言つても、誰も受け合つてくれないよ。どんな保証もない。いかなる人間の保証もない。ただキリストとの関係において、それだけが保証だ。

だから、信仰とは、行くことである。「信行」、信じ行くことである。キリストのところに行くことである。仰ぐことではない。キリストの饗宴の中に入って行くことなんだ、信行とは。皆さん、一人びとりがこのようにして、キリストの原始力をいただいてごらん下さい。これだけの人数がいたら、えらいことになってしまう。

「二人の本ものがあればエルサレムを赦してやるぞ」

というのがエレミヤへの言葉だ。とにかく、本ものにならなくてはいいかん。

「さあ、本ものは？」

なんて、何も心配は要らない。キリストが、

「己が十字架を負いて我に従うもの」

と言つて、

「さあ私はできるかなあ、十字架を負いて我に従うなんて」

と思う。前の方は、

「こういういろんな者よりも私を桁違いに、次元を違つて愛するか」



と。

「愛せよ。我が愛を受けろ」

ということです。

「我が愛を受けると、今度は、父母も妻子も兄弟も姉妹も恋人も、みんな逆にお前が救うことになるぞ」

ということなんです。

「捨てたら、本当は救うことになるぞ。捨てなければ、救うわけにはいかんぞ」

と。捨てるということは、

「他のものとは比較することのできない絶対なる神・キリストとの関係を100%に立てろ」

と。キリストは十字架で全身を与えた。パウロが、

「われキリストとともに十字架せられたり。もはや我れ生くるに非ず」

「生くるに非ず」とは「無」ではないですか。「死」と言おうが「無」と言おうがいいよ。

キリストわが内において生き給うなり」

と言った。

「キリストがわが内において生き給うなり」

と、その時にはこの十字架が負えるわけです。

私の讚美歌にもあるでしょ。昔からの殉教の人たちは本当に素晴らしかった。そのようにして本当に十字架を負っていった。カトリックの歴史には素晴らしい人がいる。長崎にもいる。カトリックのプロテスタントのと、そんなことを言っているのではない。本当のキリスト者ということだ。とにかく、宗派争いくらい馬鹿らしいことはない。どこだっていいよ、無教会であろうと何でも。ただ

「本ものであるか」

ということだけが問題です。ところが、分け隔てをしたりする。

それぞれの召団はそれぞれの特徴を大いに持つてください。と同時に、こうやって皆で一緒にいる時は、「自分は何々召団だ」なんて、そんな気持は突き抜けていなくてはダメです。ただキリストの僕、婢はしためであると。その境地に入ると、キリストの凄い言葉が、とてもかわない言葉が、逆にもの凄い力になる。だから、福音なんです。そうでなかったら、福音にはなっていない。キリストの言葉にはとてもかなわない。水を割らないもの凄い言葉ばかり貫いているから。

「そのもの凄さの中に入れてやるぞ。そうしたら逆に、お前は本当に人を救うことになるぞ」

とキリストは言う。伝道とはそういうことです。



●無即無限無量

それで、妙な譬えをキリストは言つてらつしやるが、

「しかし、そのように天国のためにはお前はそんな譬え以上の境地に入らなくては」

と。この譬えは、後のキリストの言葉と論理的にはちよつとつながらない。「かくのごとく…」と、何が「かくのごとく」だと思ふんですけれども。

³³斯のごとく汝らの中その一切の所有を退くる者ならでは、我が弟子となるを得ず。

この「一切の所有を退くる者」とは、自分自身も「所有」だ。

「自分自身をも退けるものでなければ、私の弟子となることができない。この世のことの計算もこのようにしてやるんだが、まして天国では計算ではないぞ。全部退けるものでなければ、弟子となることができない」

と。無即無限無量の世界、無一物無尽蔵の世界です。

私は、「有る」とか「無い」とか言っているのではない。

「有ろうが無かろうが、全部これは神のものである」

と、本当にその自覚を持って我々は生きなくては。この世の常識を乗り越えたところにならないと。天国に行く時に何を持って行くんですか。愛読の聖書一卷も持って行くわけにいかない。たくさんお金をためたり、いろんなことをしているが、一体どうするんですか。大いに善用しないでどうするんですか。すべて神有です。すべて神の有です。

とにかく、突き抜けたところに入っていくと、面白い——面白いと言つてはおかしいけれども——本当に次から次へと創造的になって行く。いわゆる悟りの世界ではない。そこが、この福音の世界は凄いんだよ。

キリストの次元は、とても言葉にならない。ダンテも詩を書いていて、最後に筆を投げってしまった。とても書けないと。ミケランジェロも鑿を投げてしまった。神さまの世界は人間がとても表現できない。ただ、生涯をもつて、生活そのものをもつて、表現するのが最高の表現だね。

要するに讚美です。その点で讚美歌というのは非常に大事なんだ。大いに普段、歌っていますか。もっと歌ってくださいよ。歌いながらキリストと一つになり、天国に入ってしまうんですよ。うまく歌えるとかまずいとか、そんなことを言っているのではない。

ルカ伝の14章の24節と26節と33節、この三つが中心です。みんなもの凄い言葉です。

²⁴われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味い得る者なし』

²⁵さて大なる群衆イエスに伴いゆきたれば、顧みて之に言い給う、²⁶『人もし我に來りて、その父母・妻子・兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、わが弟子となるを得ず。²⁷また己が十字架を負いて我に従う者ならでは、我が



弟子と為るを得ず。

要するに、

「捨ててかかれ。自分自身を捨ててかかれ」

と。「捨身」という言葉があるんだものな、日本には。そうすると、キリストの力が来るんですから、間違わないでくださいよ。捨てて、

「何か困ってしまったなあ」

ではない。捨てると、キリストの力が来て、自分の相対的な智慧だの力以上のものがグングンやって来るから、これはもうありがたくてしょうがない。だから、無限大だという。「1」を「0」で割ると「∞」（無限大）だ。

●永遠たる愛の炎として燃える

西郷南州の『西郷南州遺訓』に、

「己れを愛するは善からぬことの第一なり」

と書いてある。キリストの言葉と同じだ。

「命もいらず名もいらず官位も金もいらぬ人は仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にし国家の大業は成し得られぬなり」

と。今の政治家は『西郷南州遺訓』でも読んだらいい。

その無の世界は、十字架がくださっているのです、私は自分で無となるのではない。自分で自分を無になんかしてはるのではない。「無き者」にしてください。即ち、「私無き者」にしてください。

トーマス・フラーという人の面白い言葉がある。

「神は動詞であって、名詞ではない。即ち、神は神したもつのである」

という。「神は神したもう」と、我々に対して働きかけている在り方を「神し給う」という。「我は有りて在らしむる者なり」

という、その「在らしむる」ものです。我々は「在らしめられて在る」ところのものである。自分で在るのではない。神は、「我は有りて在るしむものなり」と言う。太陽は有りて地球を在らしめるところの存在である。太陽がどこかへ行ってしまったら、地球はおしまいだものな。こちらの信仰がどうのこうのじゃなくて、もう、在らしめられている。空気は私たちを、肉体的な我々を在らしめている。空気に囲まれ、空気を吸っている。自然界の空気というのは絶対恩寵ですよ。誰もこれはお金で買わない。無が無限の価値を持っている。全部、そう通ずるんです。

「無即無限無量」

「0=∞」（ゼロ・イコール・無限大）

です。そのゼロを賜って、私自身がすつとんでいるのが、この十字架の恩寵なんです。



「罪が贖われました」

なんて、罪なんていうものをただ何ものかと思っただけではないよ。我自身が贖いとら
れている。だから、それを瞑想していると、もう私はグーッと力が来てしまう。

私は82歳だが、大体、私の同級生なんてのはみんなヨボヨボして杖をついていたり、ひ
ともう元気がない。同級会なんかに出ると、健康の話ばかりしていて面白くないから、
もうやめた(笑)。私はこれから仕事をしようとしているんだから、冗談じゃないよ。この
仕事が終わるまで、聖霊の力を証してやるから。エックハルトの言葉にも、

「神は絶対の無なり」

とある。凄いね、やっぱりエックハルトというのは。

「もう表現のかなたで、無というよりかしようがない」

と言うんだ。まあ、いいよ、言葉はいつでも。しかし、とにかく私たちにはキリストは神
さまを「父よ」と言われた。霊界のことを表現している言葉は全部、暗号なんです。「父よ」
と言ったって、何かヒゲのはえたお爺さんを思っているのではない。それは人間だから、「父
よ」と言うときに感覚的に人格的にくるから、その信頼の神をキリストは「父よ」と言っ
て信頼された。そして、

「神は霊なり」

とキリストは言われた。霊神・父神ということとは、キリストの自覚の中に、意識の中に離
れることはできない。要するに、

「絶対なる存在者の命、愛、光、こういうものが本当に自分の中にキリストを通し
て来ているか」

ということだけが問題なんです。

「私は生きています。死んでも死にません」

と本当に言えるかと。それは、最後にやるヨハネ伝でそのことはうんと出てくるから。

まあ、とにかく、福音書というのは凄いね。福音書一卷をしょっちゅうポケットに入れて
読みなさいよ。新約聖書の安いのがあるからさ、ポケットに入るよ。

「私はもう福音書を暗唱しました、もう聖書は要りません」

と誰か言ってくれなくては。天界に行く時は聖書も持っていけないからね。魂の中に聖書
が溶け込んでないと。そして、隣人をこの素晴らしい世界に何としてでも、救ってやりたい。

「キリストに捨てられても、同胞のためには」

と、あのパウロの悲願霊願、これが我々の中に永遠たる愛の炎として燃えていなくては。
そういうのが本当のキリスト者です。

話は少し先にまで行ってしまったけれども。この十二召団は楽しいです。ケチなことを
思うなよ。本当に歌いつつ進んでいきます。おわります。あとは祈ります。

